

聖書：マタイ 15：29～39

説教題：異邦人にもあふれる祝福

日時：2019年9月22日（朝拝）

29 節に「それから、イエスはそこを去ってガリラヤ湖のほとりに行かれた」とあります。この「ガリラヤ湖のほとり」とはどこかが今日の箇所理解において大切だと思います。「そこを去って」の「そこ」とは、前回見たツロとシドンの地方です。そこはガリラヤ湖より北方の異邦人の地域で、イエス様はそこでカナン人の女と出会い、やり取りをしました。そこを去ってイエス様は「ガリラヤ湖のほとり」に来られました。ここはどこなのでしょう。もしここがガリラヤ湖の西側なら、いわゆるガリラヤ地方、イエス様が宣教の拠点とされたカペナウムなどの町がある地方になります。ユダヤ人が住む地域です。しかしもしここがガリラヤ湖の東側だったら異邦人の地域になります。平行記事のマルコの福音書 7 章 31 節から分かることは、ここはデカポリス地方であったことです。つまりイエス様はガリラヤ湖の北側から降りて来てガリラヤ湖の東側へ行かれたわけです。ですからここは異邦人の地域でした。このあと見る言葉の中にも、そのことを暗示する表現が出て来ます。今日の箇所は前回に続いて異邦人の地域での出来事だと覚えて読むことが大切だと思います。

イエス様は山に登り、すわっていると、大勢の群衆がイエス様のところにやって来ました。足の不自由な人たち、目の見えない人たち、手足の曲がった人たち、口のきけない人たち、その他の多くの人々。その人々がイエス様によってみな癒されました。ある人はこれを読んでこう思うかもしれません。このような癒しの記事なら、これまでも見て来た。ここでまたこんなことが記されることに何の意味があるのだろうか。しかしこれが異邦人の地域でなされたみわざだとすると、大きな意味が出て来るのではないのでしょうか。ここに記されている様々な種類のいやしは、やがて現れるメシヤがもたらす祝福として旧約聖書に預言されていたことでした。イザヤ書 35 章 5～6 節：「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」 以前、パプテスマのヨハネが牢屋から使いを遣わしてイエス様に質問した時、イエス様はこの御言葉を引用して答えられました。マタイの福音書 11 章 4～6 節：「イエスは彼らに答えられた。『あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツァラアトに冒された者たちがき

よめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。』 そのメシヤの祝福としてイスラエルの地域で起こり始めていたことが異邦人の地でもなされた！ということを今日の箇所は記録しています。しかも一つや二つではなく、あのイザヤ書の言葉を思い起こさせるかのように網羅する仕方です。

前回私たちは、イエス様のみわざはイスラエル内部に限定されているという話を見ました。イエス様はカナン人の女の願いになかなか応じませんでした。もしかすると私たちはその記事を読んで、イエス様は異邦人に対しては嫌々一回応対しただけであるという印象を持ったかもしれません。後は異邦人には背を向けてイスラエルに戻って来られたと。しかしそういう印象を今日の箇所は打ち消しています。イエス様は多くの異邦人にあわれみのわざを行われました。旧約聖書で約束されていたメシヤによる祝福を異邦人にももたらされました。群衆はそこで「口のきけない人たちがものを言い、手足の曲がった人たちが治り、足の不自由な人たちが歩き、目の見えない人たちが見えるようになるのを」見て、驚きました。そしてイスラエルの神をあがめました。議論はあるようですが、多くの学者たちは、この「イスラエルの神をあがめた」という表現は、ここにいた群衆が異邦人であったことを示しているとします。彼らは異邦人だが、イエス様を通して働いてくださるイスラエルの神を見て「イスラエルの神をあがめた」ということであると。

前回カナン人の女は「小犬でも食卓から落ちるパン屑は頂きます」と述べて、その信仰がイエス様に称賛されました。しかしそのあまり、神が異邦人に与えるのはパン屑だけ、切れ端だけであるのではないということです。ここに癒やされた病が沢山リストされていますように、異邦人世界にも神の恵みは豊かにもたらされたということを今日の箇所は前回の記事に続いて記しているのです。

続く記事も同じです。32～39節にかけて、いわゆる「四千人の給食」の記事が記されています。すぐ思い起こされるのは少し前に見た5千人の給食の記事です。ある人はこれは一つの出来事が重複してコピーされて、このようになったのだと見ます。本当はこのようなことは1回しかなかったが、書き写す内にダブってしまって、それ以来こうなったのだろうと。またある人は2回このようなことがあったとしても、こうも似ている記事をなぜ2回も記す必要があるのか。1回で十分ではないかと考えます。しかし先程

来繰り返して申し上げますように、これが異邦人世界での出来事だとするなら、私たちは新しい視点でこの記事を読むようにと導かれるのではないのでしょうか。

まず彼ら群衆を見るイエス様のお心について見たいと思います。イエス様が弟子たちを呼びよせて言われた最初の言葉は「かわいそうに」というものでした。これまでもたびたび出て来ましたが、これは「内臓」とか「はらわた」を意味する言葉からできていて、「内臓が揺れ動くような」「腸がよじれるほどの」深い心の動きを表す言葉です。「群衆はすでに三日間、わたしとともにいて、食べる物を持っていないのです」とイエス様は言っていますが、これはイエス様と群衆が3日間断食していたということではなく、3日間イエス様とともにいるうちに人々の手持ちの食糧は尽きてしまう状態に至っていたということだと思います。このままでは帰ろうとしても途中で動けなくなってしまうに違いない。イエス様はそのようにあわれまれた。そして特にこれが異邦人に対しても！という点が大事だと思います。イエス様はここにいるのはイスラエル人ではないからと言って、切り捨てることをなさらなかった。イエス様はこの時、例外的にイスラエルの外にいましたが、そこで出会った異邦人を心底かわいそうに思ってくださいました。イスラエルの人々に対するのと変わらない心を持ってくださいましたのです。

イエス様の言葉を聞いて弟子たちは33節で「この人里離れたところで、こんなに大勢の人に十分食べさせるほどたくさんパンを、どこで手に入れることができるでしょう。」と答えます。私たちはこれを読んで、少し前に5千人の給食を体験した彼らなのだから、もう少し違う言葉を語れなかったものかと思うかもしれません。しかしこのあと16章10～11節でイエス様が指摘されるように、彼らの心は鈍かったということなのかもしれません。あるいはここでは相手が異邦人だったので、弟子たちの思いは淡白だった。前と同じようなことがなされるのはふさわしくないと考えていたからだと見る人たちもいます。

イエス様はそんな彼らに「パンはいくつありますか」と尋ねられます。そして5千人の給食の時と同じようなみわざを行われます。その時と共通するいくつかのポイントを簡単に見て行きたいと思います。まず私たちが学ぶ一つのことにはイエス様はそこにあった小さなものを用いてみわざを行われたということです。パンはいくつありますかとイエス様は問うて、弟子たちは「7つです。それに、小さい魚が少しあります。」と答えます。男だけで4千人の大群衆を前にして、これだけでは何の意味があるか？と言わずに

いられないようなものです。しかしイエス様はそれを用いて大きな御業を行われました。ですから私たちは今、自分が持っているもの、自分に与えられているものを軽んじてはならないと教えられます。多くの必要を前にして、これでは何にもならないと言ってはならない。あるいはこんな小さな私ではどうしようもないと言ってはならない。大切なことは、それをイエス様の手に差し出すことです。そうする時にイエス様は私たちには信じられないような仕方で、それを何倍にも増やし、大きくして用いてくださるのです。

その結果はどうだったのでしょうか。人々は皆、食べて満腹しました。とりあえずいくらかはお腹に入れることができたというレベルではなく、お腹いっぱい満たされました。その上、あまりを取り集めると7つのかごが一杯になりました。食べた者は女と子どもを除いて男4千人であったと38節にあります。前回の男だけで5千人よりは少ないですが、女、子どもを合わせたら1万人以上いたかもしれません。その彼らが皆、この人里離れた辺鄙な場所で満たされたのです。これは神がイスラエルの民を荒野でマナをもって養われた出来事を思い起こさせるものです。何もない場所で神が不思議な御手をもって彼らを養われました。また同時にこれは将来の天国におけるメシヤの祝宴を先取りするものでもあります。8章11節：「あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」メシヤは将来、天の御国で、ご自身の民を、ご自身のテーブルに着かせて豊かにもてなして下さいます。そういった意味を持つ出来事をイエス様は何と異邦人の地でも行われた。イスラエルでの出来事に少しも劣ることのないみわざとしてです。

最後の39節に「それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、マガダン地方に行かれた」とあります。マガダン地方とは具体的にどこかははっきり分かりませんが、続く16章1節でパリサイ人たちがやサドカイ人たちが近づいて来ますから、そこはもうイスラエルの地だったのでしょう。イエス様はここで異邦人の地から戻って来たと考えられます。

以上の記事からまとめとして最後に二つのことを述べたいと思います。一つは今日の説教題の通り、今日の箇所メッセージは、「異邦人にもあふれる祝福」であるということです。前回の24節のイエス様の言葉からすれば、今日の箇所に記されていることは例外的なことと言えます。イエス様は地上の生涯の間、ご自身の働きをイスラエルに限定されました。これが原則です。しかしその中でも前回の記事、そして今日の記事が

あることは、異邦人である私たちにとってどんなに大きな慰めでしょうか。確かに本格的な異邦人宣教はこの後です。イエス様の復活後です。しかしイエス様は異邦人に対しても同じあわれみの心を持っていてくださったことが今日の箇所にも証しされています。カナン人の女だけでなく、あらゆる病に悩む多くの異邦人に恵みを注いでくださいました。そしてイスラエルで5千人の給食のみわざをされたように、異邦人世界でも4千人の給食のみわざをしてくださりました。ここから分かることは私たちは一段低い第2級のクリスチャンではないということです。神は異邦人にも少しは関心を持っているが、せいぜいあげるのはテーブルからこぼれ落ちたものだけだよというのではない。イエス様はイスラエルに対するのと同じ祝福を異邦人にも与えてくださる救い主であることをここで示してくださいました。そしてその御心は、時至って使徒の働きの中ではっきり示されて行くこととなります。神はそのお心をもって、今日も異邦人の私を心に留め、あわれみの心を傾け、恵みの御手を伸ばしてくださる。この神に感謝して、神が遣わして下さったイエス様のところに行って、その恵みに豊かにあずかる者とされたいと思います。

そしてもう一つは、このように異邦人をもあわれんでくださるイエス様のあわれみはどこへイエス様を追いやるかということです。次の16章で弟子たちはイエス様に対してついに立派な信仰告白をします。そしてその時からイエス様の受難予告、やがての十字架の死についての予告が始まります。今日の箇所におけるイエス様のあわれみと、次の章から語られる十字架の死の予告にはもちろん関係があります。その関係とは、イエス様は私たちを今日の箇所のようにあわれんでくださるお方だから自ら十字架の死へと向かって進まれるということです。言い方を変えればイエス様の今日の箇所のみわざは、ただではないのです。イエス様がこのような恵みをもたらすことができるのは、ご自身が代わりにやがて十字架にかかって、その代償を支払われるからです。そういう意味でイエス様が人々を癒やされたみわざは、イエス様が彼らの代わりにその病をご自分に引き受けられた出来事であったと言えます。8章17節：「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った。」 またイエス様が荒野のような場所でパンをもって人々のいのちを支え、またメシヤの祝宴の前触れにあずからせたのは、ご自身のいのちをささげて、その代償を支払ってくださるからです。ですから今日の箇所の癒やしの記事は、単に地上的な事柄ではなく、イエス様が十字架の死を通してやがて私たちに与えてくださる全人的な祝福、体も心も本来のあるべき健康な人間の状態に回復させてくださるみわざを指し示しています。また4千人の給食は、イエス様が私たちの必要を満たして、

やがて天の御国の祝宴に豊かに生かしてくださることを象徴しています。私たちは、異邦人をもこのようにあわれんで十字架へと進まれるイエス様に感謝して、この私たちの救い主のもとに行きたいと思います。そして十字架の死から流れ出る今日の箇所が指し示す祝福、すなわち本来の健康な人間性を回復する祝福、そして御国で約束されているメシヤの祝宴にあずからせていただく幸いへ進んで行きたいと思います。